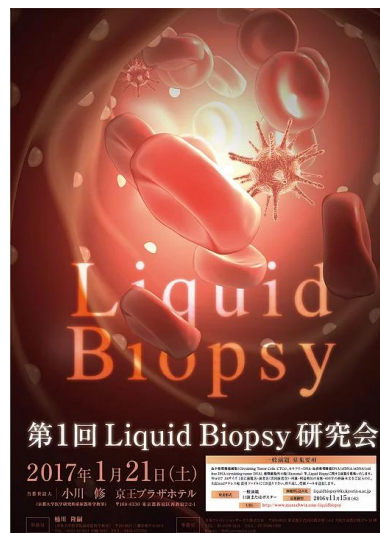


第1回 Liquid Biopsy 研究会

京都大学泌尿器科 赤松秀輔、小川 修

お正月気分の抜けきらない1月中旬、第1回 Liquid Biopsy 研究会が開催されました。昨今、泌尿器科領域では新規のアンドロゲン受容体経路阻害剤のほか、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤などの癌に対する新薬が次々と開発されています。しかしその一方では、治療の複雑化、さらには医療費の高騰が大きな問題となっており、いわゆる“Precision Medicine” 実現に向けたバイオマーカーの開発が大きな課題となっています。このような状況で泌尿器科を中心に Liquid Biopsy に関する研究会が立ち上げられ、泌尿器科以外の領域からも多くの専門家を集めて学術集会が開催されたのは非常にタイムリーで意義のあることであったと思われまます。実際、当日は約 70 名の参加を見込んでいたところに最終的に 170 名もの参加者が集まり、Liquid Biopsy への関心が高まっていることを実感させられました。



研究会では泌尿器腫瘍領域における circulating tumor cell (CTC)や cell free DNA (cfDNA) 研究の最先端の成果が各施設から発表された他、エクソソームやマイクロ RNA 等、広義の Liquid Biopsy に関する研究成果も紹介され、活発な議論が交わされました。また、Liquid Biopsy 研究は検出、解析技術の急速な進歩により支えられており、今回の研究会ではコーポレートセミナーとして5社から CTC, cfDNA 解析の最新技術が紹介されました。参加者の方々はこれらの発表を通じて、CTC 中の AR-V7 を始めとした各新規マーカーの有用性や臨床応用へ向けたハードルといった現状を一通り把握できたのではないかと思います。

特別講演1およびランチョンセミナーでは近畿大学の西尾和人先生、がん研究会の片山量平先生より乳癌、肺癌における Liquid Biopsy や Precision Medicine の現状について詳しく解説を頂いたほか、午後のワークショップでは肝胆膵癌での cfDNA シーケンス解析についての講演もあり、他癌種における Liquid Biopsy 研究の最先端に触れることもできました。特に肺癌では既に cfDNA がコンパニオン診断として本邦でも承認されたことが報告され驚きました。今後、泌尿器科がんでも Liquid Biopsy が臨床実装される可能性があることを予感しました。また、同時に、他癌種では Liquid Biopsy 研究が大規模臨床研究と直接リンクしており、その成果がダイレクトに臨床応用に結び付く状況になっているようで、泌尿器科領域においても当研究会を中心に今後ますます本気で臨床応用を目指した研究体制を整えていく必要性が感じられました。

特別講演2では国立がん研究センターの落谷孝広先生より、様々な癌の診断においてエクソソームが非常に有望な体液診断になる可能性をご講演いただき、あまりの綺麗なデータに参加者一同、驚愕しました。最後には招請講演としてAR-V7を世界で最初に発見した研究者の一人であるJohns Hopkins大学のJun Luo先生から、AR-V7だけでなく前立腺癌のバイオロジーの観点から今後のLiquid BiopsyやPrecision Medicineの展望について概説いただき、前立腺癌領域における世界の最先端の研究成果に触れることができました。

内容が多すぎて休憩時間がほとんどなく、参加者の方々は心身ともに疲れ切ったこととは思いますが、一日でLiquid Biopsyの現状を効率的に把握できたのではないのでしょうか。最後に本研究会の開催に際して多大な尽力をいただいた事務局の杏林大学の桶川隆嗣先生と教室員の皆さまに心からお礼を申し上げたいと思います。来年は桶川先生を代表世話人として第2回Liquid Biopsy研究会が予定されており、科の枠を超えてより幅広い領域の専門家が多数集うことを期待しています。